
逃亡

千雲楓

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃亡

【Nコード】

N7079X

【作者名】

千雲楓

【あらすじ】

ちよつとホラー風味だけど、ミステリーのつもり。

見られた。

そのときは確かに、そう感じた。

「おい幸一、どうしたんだよ一体」

テーブルの向かいに座った友人が怪訝な顔をしてこちらを覗き込んでくる。剃りすぎて薄くなった眉毛が歪んで、眉間に妙なしわしわを作る。

僕は、「なんでもない」と薄笑いしながら、注意深く手に持ったハンバーガーをトレイに戻した。ただの気のせいに違いない。そのはずだ。そうゆっくりと自分に言い聞かせつつ、もう一度友人に向かって「なんでもない」を繰り返す。

「まったく、本当に変なやつだよな、お前」

彼はやれやれといった風に首を振ると、トレイの上のポテトに手を伸ばし、二つ三つ同時に口に放り込んだ。もぐもぐもぐ、ごくり、もぐもぐ……口元がまるで異生物のごとく動く。自分の口も、食べている時はあんなふうに動くのだろうか。気を紛らわせようと、僕は窓際の青々としたポトスを見つめた。脂ぎった香りが、客のまばらなカウンターにぼつんと立った暇そうな店員の後ろから流れてくる。

日曜のバーガーショップというのは、暇人たちの外出する格好の口実だ。というのは自分がその暇人の一人だからよく理解できることで、プラスその暇人を何年も続けてきた経験から、それは果たしてこの世界のどの暇人にも当てはまるということを、僕は確信を持って断言できる。しかし、だからといって日曜にバーガーショップ

にいる人間は全員暇人かと思ったら、これはまた違う問題だ。口実にするのではなく、差し迫ってそうしなければいけないような人も確かに存在する。今まで一度も見たことは無いが。

「ところでさ、なんでいきなり呼び出したりしたんだよ。暇だったからいいんだけどさ」

「ちよつとな、逃亡中なんだよ」

そこで友人はなぜか、少しだけ自慢げな顔をした。

「逃亡中？ ……ふうん、何から」

「うん、わからん」

おいおい。

僕は呆れてコーラのストローを回した。じゃくじゃくと氷の音がある。

「そんな馬鹿にしたみたいな顔をするなよ。俺が見つけた新しい非日常の楽しみ方だぜ？」

「もうその言い方からお前はとことん馬鹿らしい。一体なんなんだ、非日常って」

「それはな……」

友人はとたんもどかしげな顔をして、日常にあらずとか新しい次元へとか自分でも分かってなさそうなことを、身振りを交えて散々喋ったあげく、

「まあ、そんなことだ」

と勝手にしめてしまった。僕も、彼の無駄に長つたらしい説明にもう面倒くさくなったので適当にふんふんと頷く。そして『非日常』を『彼なりの人生の楽しみ方』と定義づけた。ああ、随分分かりやすくなったものだ。

「でお前、何かわからんものに追われて午後三時のバーガーショットに駆け込んだのは別にいいけど、何で僕をわざわざ呼んだんだ？」

「実はな、最初は遊びだったんだけどよ」

一瞬、本当に一瞬だけ、彼は泣きそうな顔をした。

「本当に、何かが俺を追ってきているような気が途中からしてきて

さ……」

「……大丈夫だよ。ただの気のせいだ」

「そう思うか？」

「ああ」

安心させるように頷きながらも、鼓動が早くなるのを抑えられなかった。

本当に、本当に『気のせい』なのだろうか。さっき視線を感じた時も、自分はそうやって可能性を否定した。それはきつと、当たり前のこと、少しも間違ったことなどではないはずだ。

——でももしも、彼を追ってきているものが、まだこちらを監視しているとしたら？

「いや、お前にそう言ってもらうと俺も安心できるよ。悪かったな呼び出して」

友人は顔を崩すと、いつもどおりははと笑って僕の肩を叩いた。僕も「お、おう」と彼に笑みを返す。

——そうだ、心配することなど何も無い。気のせいさ。

彼の変わらない笑顔を見て、密かに僕は心に言い聞かせた。そう、何も無い、何も無い。

きつと。

＊

メッセージを四件 お伝えします。

『幸一、なあはやく出てくれよ、後生だから……くそつ、一体なんなんだよアレはっ！ ずっとずっと俺についてきやがる……早く早く、電源入ってるんだろ、なんでこんなときに限ってでてこねえんだ……ん、何だ……？ う、うわああああああっ！』

『はあ、はあ、逃げ切ったか……おい頼むよ幸一、早く出てくれえ
……くそ、息がでかねえ。……うわっ、来やがったっ!!』

[illegible]

『……コウイチクン？ モチロン、コノメッセージキイテクレテイ
ルヨネ。』

ツギハ、キミノバンダカラ』

メッセージを四件 お伝えしました。

(後書き)

テクニックも欲しいけど、それよりも魅せる文が書けるようになり
たい…… or z

最後まで読んで下さって、本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7079x/>

逃亡

2011年10月25日19時08分発行